

アダルトグッズOL日記 01

楊 梓 (ヨウ シ)

自己紹介

私は中国内モンゴル自治区出身、2020年3月に立命館大学人間科学研究科を卒業し、日本のアダルトグッズメーカーに就職した。来日5年目で、違う文化に触れ合い、性、ジェンダー、女性の社会的地位などのテーマに関心を持つようになった。卒業論文のテーマは「現代中国女性のアダルトグッズに対する態度についてのインタビュー調査」だった。

アダルトグッズといえば、まだタブー視されたり、神秘的だと思われたり、「ザ・アダルトグッズ」という男性目線、嫌らしい、エロい、昔からのイメージなど、様々な印象があると思っている。この記事は現場の出来事を紹介することにより、現代のアダルトグッズに関する実情を伝え、性とジェンダーに関する文化的、社会的なことも自分の感想で述べたいと考えている。

入社して約4ヶ月が経った。去年の今頃まだ就活で精一杯の時期だった。

唯一新卒募集している某社に落選し、某社以外の会社を探し始めた。

他の業界なら、新卒求人サイトで見つかるが、アダルトグッズ会社は一切なかった。アダルトグッズ会社があるとしても、転職サイトにしか掲載されていなかった。さらに、他の業界より、会社の数がかなり少なく、二十数社しか見つけられなかった。興味のある会社全てにメールし、自分をアピールし、2社しか返事がなかった。

アダルトグッズの小売店なら、アルバイトから就職という進路があると発見し、同時にアダルトグッズ小売店のアルバイトも探していた。応募の際に、自分の状況を説明し、本社の面接チャンスを頂いた。

3社面接受け、そのうちの1社に就職した。

アダルトグッズ会社に

対する反応が人それぞれ

就活のあらゆる悩みがあり、相談をした。相談の場で面白いことが起きていた。全部

アダルトグッズ業界は

新卒募集がほとんどないため、

就職は別方法

で3人の相談員に面談し、アダルトグッズ会社に対する態度は全く違った。Aさん(30代女性)はとても興味津々で自分が知っているアダルトグッズに関するニュースなどを共有しつつ、相談してくれた。Bさん(30代女性)はアダルトグッズ会社に関するコメントは一切なく、相談内容についてアドバイスをくれた。Cさん(50代女性)は相談内容より、「アダルトグッズ会社」に就職すること自体についてとても心配してくれた。「本当にこんな会社でいいの?」「もっと考えた方がよい」「こんな会社で転職が難しいよ」、まるで私が騙されたようで、最後に「賃貸してくれなかったらどうしよう」と生活まで心配してくれた。

この件から、日本女性がアダルトグッズに対する態度が多少でも反映されていると思う。Aさんはアダルトグッズに関する情報に興味があり、人に語る。その語りから、アダルトグッズは悪い、嫌らしいなどの考えがあまりなかったし、逆に興味があり、積極的な感じであった。Bさんの場合は2種類の可能性がある。アダルトグッズ関係の話は恥ずかしく、語ってはいけないため、わざと触れずに相談を行っていた。あるいは、アダルトグッズ会社も他の業界と同じで、特に触れる必要がない。Cさんの場合は、明らかに、アダルトグッズはよくないもので、アダルトグッズ関係の仕事は社会的承認されないという考えだった。相談員3人の態度がそれぞれ典型的で、代表的だと思っている。

では、3人が違う態度になった原因を考えてみると、まず、社会全体は生殖の性を

推奨するが、快樂の性を推奨しない、逆に禁じる部分もある。例えば、生殖に関する研究が多いが、快樂に関する研究が少ない。もう一つの理由は女性は「生殖のための聖女」と「快樂のための娼婦」に分けられ、良い女性は性快樂を追求してはいけないという思想の影響で、Cさんはアダルトグッズ会社に対する態度はそうなっただろう。生殖のためでも、快樂のためでも、主語は男性であって、女性は長年性の中では客体として存在していた。しかし、近年、女性のためのAV、女性のためのアダルトグッズショップなどが増え、女性が性の中での主体性の研究も増えている。日本社会がこういった変化があるからこそ、Aさんは積極的にアダルトグッズについて語れるだろう。

アダルトグッズ会社でも文化が様々

アダルトグッズ会社はほとんど同じではないかと世の中はそうイメージしているだろうし、自分も大した違いはないだろうと考えていた。しかし、面接を受けることにより、同じくアダルトグッズ業界でも企業文化がそれぞれ違うと実感した。

A社はメーカーかつ卸売のビジネスで、女性社員が世界中の女性のためのグッズを卸売するというので、女性社員が女性の快樂の正常化という信念をもち、仕事をしている。

B社は「性の食欲を追求する」「変態でも弊社の大事なお客様」という文化で、女性用グッズだが、ターゲットは男性客という、

昔からの the アダルトグッズメーカーみたいな感じだった。

C社は主に男性向け商品だが、アダルトグッズメーカーだが、いかにビジネスをよくできるかということに力を入れている。

アダルトだからこそ、

よりハラスメントに注意

学生時代のアルバイト先や日常生活から一部の中年男性はエロジョークが好きで、よく語る。あるアダルトグッズメーカーの女性社員のインタビューに自分がよくエロジョークを語るという記事を読んだことがある。入社前に仕事をしたらもっとよくエロジョークを耳にするだろうと思っていたが、実際はまだ一回も聞いたことがない。エロジョークだらけの議員日中懇親会と比べ、どうやら不思議な感じ。コロナでまだ一回も飲み会したことがないので、飲み会の時にどうなるかまだ分からないが、飲み会の後にまた報告する。

アダルトグッズ会社で働く人というのは、性、アダルトグッズとかエロ系に興味があるから入社しただろうと思う人は少なくないだろう。自分もそう思っていたが、現実には全く違った。

アダルトグッズ会社だが、先輩たちの入社理由はそれぞれで自分の想像を超えた。会社の事業内容がよく分からないままに応募して、仕事してからあれ？と後から分かった先輩、町が好きだから入社した先輩、IT企業から転職した先輩、語学を生かしたいことで転職してきた先輩など、様々な経緯がある。

あるアダルトグッズメーカーが社員みんなにグッズを配るとその会社のHPで見ることあるので、就職した会社も恐らくあると思い、入社したが、そのような制度がなかった。チームの先輩に聞いてみると、人それぞれ違い、ハラスメントと感じて欲しくないなので、あえてチームから「使うか」と聞かない、本人からテストしたい意思があれば、もちろんサンプル申請などができると、アダルトグッズ会社だからこそ、よりハラスメントに注意するところは少し驚いて、尊敬した。